



緊張した表情で乳しぼりを体験する児童

◎ 能登地震被災地の小学校で「もーもースクール」
「珠洲」地域交流牧場全国連絡会(交牧連、事務局・中央酪農会議)は1日、石川県珠洲市立飯田小学校(四十住基子校長)で「もーもースクール」を開いた。乳牛や酪農家との触れ合いを通じて、能登半島地震で被災した子どもたちの心の傷を癒すことや、酪農への理解醸成が目的。震災の被害を受けた地元酪農家らが乳牛1頭と子牛2頭を連れて同校を訪問した。

「あたたかい」「こわい」

初めて牛に触れる子どもたちの声は正直だ。自分たちよりはるかに大きな乳牛の前に、やや緊張気味な表情を見せる。酪農家の指導を受け、初めて乳しぼりを体験した6年生の男の子は「思っていたよりも力が必要だった。手がつかれたが、上手くできてうれしい」と笑顔を見せた。

搾乳体験を終えた子どもたちは、牛への興味を増した様子だった。「牛の顔が見たい」と頭の方に移動してじつくり観察する児童や、自ら希望して餌をあげる姿もみられた。

この日は全国から酪農家13人と協力者計18人が参加した。全校児童62人が乳牛の搾乳体験や子牛との触れ合いを楽しんだ。

子牛の周りに集まった子どもたちは、はじめ恐る恐る手を伸ばしていた。慣れてくると「フサフサ」「かわいい」と積極的に触れ合っていた。子どもたちと子牛は目線が近い。「まっげが長い」「歯を見たい」などと興味津々だった。子牛に指を吸われた児童は「気持ちいいよ」と友だちに勧めていた。

つま先立ちをして歩く子の姿も。「牛の立ち方を真似している」と言い、事前に授業で牛の身体構造について学んでいたようだ。

酪農に関する授業も行われ



「あたたかい」「かわいい」と子牛をなでる子どもたち

た。子どもたちは真剣な表情で話を聞き、普段から給食で飲んでいる牛乳や、牛の命の大切さや感謝を学んだ。イベントを終えた6年生の男の子は「牛を育てることの大変さが分かった。これから牛乳を飲むとき、牛や育てた酪農家に感謝し『いただきます』を忘れないようにしたい」と感想を語った。

同校の四十住（あいずみ）校長は、「子どもたちが牛と触れ合う機会はあまりない」としたうえで「（もーもスクールは）去年行う予定だったが、豪雨の影響で中止になってしまった。子どもたちは『牛に会いたかった』と言っていた。みんな楽しんでくれてうれしい」と喜びを語った。牛を連れてきた西出牧場（能登町）の西出譲さん（38）は「能登で牛を学校に連れていく機会は、今まで全くなかった。反応は上々で、子どもたちにも楽しんでもらえて何よりだ」と話した。

松田牧場（珠洲市）の松田徹郎さん「震災で子どりができなかったことができた」

同校に学校給食牛乳を供給している（能美市）の廣田孝司社長も参加した。「

（反応を）

想が面白い
酪農の今後
で崩れた牛舎の解体が進んできている。地震から立ち上がり、これからやっていくことが楽しみだ」と期待感を示した。

もーもスクールは、交牧連が子どもたちへの酪農教育を目的に全国で行っている施策。酪農家が牛を連れて小学校を訪れ、搾乳体験や子牛との触れ合いを通じて酪農への理解醸成を図る。今回は、被災した子どもたちを元気づけるため、能登半島の小学校で実施した。